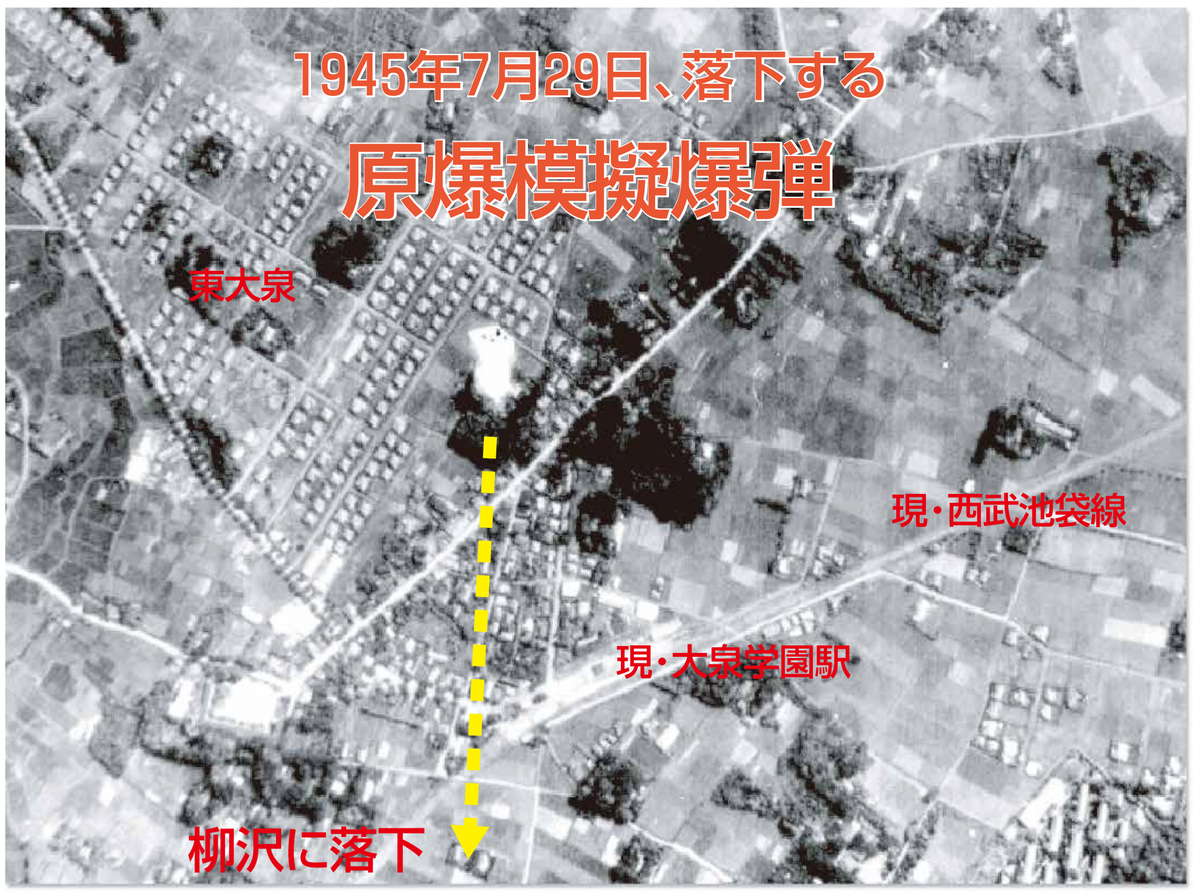
原爆模擬爆弾の被害



写真提供:工藤洋三氏

写真提供:工藤洋三氏

パンプキン爆弾

重さ4.5トン（通常の高性能爆薬2.5トン）
投下したB29（愛称ボックスカー）は10日後、
長崎に原爆を投下。

しじゅうから第二公園

撮影:牛田守彦氏

1945（昭和20）年7月29日、西武柳沢駅南にある現在のしじゅうから第二公園の東側に、強力な爆風を生じる爆弾１発が投下され、畑仕事をしていた女性ら３名が亡くなりました。その爆弾が何であるのか長い間不明でしたが、米軍資料関係者らの調査により、原子爆弾の投下訓練のために全国約50ヶ所で実施された作戦の一つであることが判明しました。

平成４年７月20日
(1992年)
第２０２号
発行毎月20日
編　集
公民館だより編集室
共同発行
東京都保谷市立公民館

ほうや
公民館だより

ふれあいの場となりますように

住吉公民館
保谷市住吉町6-1-25
(0424) 21—1125
FAX 21—7780
柳沢公民館
同市柳沢1-15-1
(0424) 64—8211
ひばりが丘公民館
同市ひばりが丘2-3-4
(0424) 24—3011
FAX 24—6010

1945年（昭和20年）7月29日の保谷の空襲は、
原爆投下の訓練だった!!
—米軍機密文書で確認—

昭和から平成にかわり戦後生まれの人たちが大半を占めるようになりました。一見平和な経済大国となったわが国ですが、四十七年前、広島、長崎に原子爆弾が落とされ、その恐ろしさを知らない人はほとんどいないでしょう。

人類史上初めて投下され、世界唯一の被爆国となった日本ですが、その原爆投下訓練が、まさか保谷で行われていたなんて思いもよらないことでした。

それが今回、米軍の機密文書で判明し、それによって肉親を失い傷を負い、被害を実際に受け、あるいはそれを助けるために汗と涙をながした人々にも会って、当時の状況を聞くことができました。

これまでに入手した資料と情報によれば、およそ次のような内容にまとめられ、保谷の空襲を語り継ぐうえで、新しい側面をつけ加えることになりました。

一万ポンドの大型爆弾

戦争終結が一九四五年（昭和二十年）八月十五日だったのはご存じのとおりですが、その前日の十四日、愛知県春日井市に四発の一万ポンドという大型爆弾が落とされました。

「明日、重大放送があるから全員ラジオを聴くように」

と、国民に知らされているときもあり、すでに日本の無条件降伏が決まり、手続きも終わっている時期でもあるはずなのに、なぜこんな空襲をうけたのか!?という疑問がこの話のキッカケとなったといいます。

一九八六年「春日井の戦争を記録する会」ができ、関係する資料の収集や分析が植物的に行われ、ワシントン市にある国立公文書館に保管されているマイクロフィルムの翻訳や、関係のありそうな資料を調べていくうちに「第二十空軍特別爆撃任務」なるものにぶつかりました。作戦命令や作戦任務報告書などをみていくと、「特別爆撃作戦十六号」というのがありました。これが長崎へ投下した原爆の作戦番号だという説があり、ますます疑問が広がっていく中で、出撃記録の無い五〇九混成群団の存在がわかってきました。

これこそ原爆投下の特殊任務を受け持つチームで、極秘にするため記録を残さなかったのではないかという推測が出てきます。"パンプキン"と呼ばれ、B29戦略爆撃機一機に一発しか搭載できず、作戦の出撃体制が整ったのが、七月に入ってからだといいます。そのころニューメキシコ州の砂漠で原爆実験が行われ、七月十六日の実験で成功し、使用が許可されます。

五〇九混成群団特別作戦任務によれば、七月二十日から八月にかけて五十発の投下訓練が行われたことが昨年秋に判明し、その二十五番目の二万ポンド爆弾が保谷に落とされていることがわかりました。

そして、その時の状況を調べてはしいという連絡が、日本の空襲研究家で作家でもある奥住喜重（よしじゅう）氏（八王子市在住）を通して公民館にありました。

長崎と同型

公民館ではさっそく、資料の調査、生存している関係者の確認をし、数回にわたって取材と懇談会を持つことができました。そして春日井市の方々からいただいた資料が事実と一致し、七月二十九日に市内柳沢に落とされた新型の爆弾が「原爆投下の訓練（模擬原爆）であったこと、そして落とされたB29が長崎に原爆を投下したのと同機で、爆弾の型も長崎のものと同じだったことがわかりました。

今回の取材にあたって関係者の非常に熱心なご協力をいただきましたが、当時から、これまでにない特殊な爆弾だったと感じ、原爆となんらかの関係があったと考えていた人も多く、ひそかにそうしたうわさが流れていたといいます。

関連記事は、二～五ページに特集としてまとめました。

長崎でさく裂した原子爆弾 "ファットマン"